

第三部第二十九章とマルクス・エンゲルスと大谷氏

目次

- ・「第二十九章 銀行資本の諸成分」の概要
- ・「第二十九章 銀行資本の諸成分」についての大谷氏の考え・意見
- ・「第二十九章 銀行資本の諸成分」について青山の考え・意見

「第二十九章 銀行資本の諸成分」の概要

・抜粋

銀行資本の構成(大月版⑤ P594)

- ①「現金、すなわち金または銀行券」と
- ②「有価証券」で有価証券は⑦「商業証券、手形であつて」、「その割引が銀行業者の本来の業務とされるものである」⑧国際証券等の「公的有価証券」や株式などの「利子付証券」の二つに分かれる

P595-602

「利子生み資本」は、「純粹に幻想的な觀念であり、」「ただ債券を、それにたいする自分の占有権を、売ることができるだけであ」り、「支払がその子(利子)とみなされる資本は、やはり幻想であり、架空資本である。」(P595)「国債という資本(利子生み資本——青山)」は、「純粹に架空的な資本なのであつて、この債務証書が売れないものになった瞬間からこの資本という外觀はなくなってしまうであらう。」(P596)「利子生み資本」は、架空資本として、「資本の現実の価値増殖過程とのいっさいの関連は最後の痕跡に至るまで消え去って、自分自身によって自分を価値増殖する自動体としての資本の觀念が固められるのである。」(P597)

「債務証書——有価証券——が国債の場合のように純粹に幻想的な資本を表しているのではない場合でも、この証券の資本価値は純粹に幻想的である。」「信用制度は結合資本を生みだす。」「株式は、この資本によって実現されるべき剰余価値にたいする按分比例的な所有権にほかならないのである。」(P597-598)「このような所有権は、その価格が独特な運動をし独特な定まり方をする商品になるのである。……その市場価格は、その権利名義によって取得される収益の高さと確実性につれて変動する。……この証券の市場価値はある程度まで投機的である。というのは、この市場価格は、ただ現実の収入によってだけでなく、予想され前もって計算された収入によって規定されているからである。……その価値は、つねに、ただ、収益が基本換算されたもの、すなわち、収益が幻想的な資本にたいしてそのときの利子率で計算されたものでしかない。だから、貨幣市場の逼迫の時期にはこのような有価証券の価格は二重に下がるであらう。第一には、利子率が上がるからであり、第二には、貨幣に実現するためにこれらの証券が大量に市場に投げこまれるからである。……(しかし——青山)嵐が去ってしまえば、これらの証券は、失敗した企業や山師企業を代表するものでないかぎり、再びもとの高さに上がるのである。恐慌中に起きるこれらの証券の減価は、貨幣財産の集中のための強力な手段として作用する。」(P598-599)「すべての資本主義的生産の国には、このような形態で巨大な量のいわゆる利子生み

資本または **moneyed capital** が存在している。そして、貨幣資本の蓄積というものの大きな部分は、生産にたいするこのような請求権の蓄積のほかには、すなわちこのような請求権の市場価格の蓄積、その幻想的な資本価値の蓄積のほかには、なにも意味しないのである。」(P600)

「銀行業者資本の最大の部分は、純粋に架空なものであって、債券(手形)や国債証券(過去の資本を表しているもの)や株式(将来の収益にたいする支払指図券)から成っているのである。……(これらの証券の請求権は——青山)絶えず変動する架空な貨幣資本で表現されるということである。そのうえに、この架空な銀行業者資本の大部分は、銀行業者の資本を表しているのではなく、利子がつくかどうかにかかわらずその銀行業者のもとに預金している公衆の資本を表しているということが加わる。」(P601)

「利子生み資本や信用制度の発展につれて、同じ資本が、または同じ債券でしかないものさえが、いろいろな人手のなかでいろいろな形で現われるいろいろに違った仕方によって、すべての資本が二倍になるように見え、また場合によっては三倍にもなるように見える。」(P602)

「貨幣が現実にくいつの資本を表すかは、貨幣が別々の商品資本の価値形態として何回機能するかによって定まるのである。」が「この信用制度のもとではすべてが二倍にも三倍にもなったただの幻想の産物に転化するのであるが、同じことは人々がやっと確かなものをつかんだと思う「準備金」についても言えるのである。」(P604-605)、そして、このようなもとでの、信用破綻もまた、「幻想的である」(P606)

・概略

銀行資本の構成は、①「現金、すなわち金または銀行券」と②「有価証券」とからなっており、その最大の部分は「有価証券」で、③「その割引が銀行業者の本来の業務とされる」「商業証券、手形」と④国債証券(過去の資本を表しているもの)等の「公的有価証券」や株式(将来の収益にたいする支払指図券)などの「利子付証券」の二つからなっている。

「利子生み資本」＝「支払がその子(利子)とみなされる資本」は、やはり幻想であり、架空資本である。債務証券——有価証券——が国債の場合のように純粋に幻想的な資本を表しているのではない場合でも、この証券の資本価値は純粋に幻想的である。貨幣が現実にくいつの資本を表すかは、貨幣が別々の商品資本の価値形態として何回機能するかによって定まるのであるが、信用制度のもとではすべてが二倍にも三倍にもなったただの幻想の産物に転化する。「利子生み資本」は、架空資本として、資本の現実の価値増殖過程とのいっさいの関連は最後の痕跡に至るまで消え去って、自分自身によって自分を価値増殖する自動体としての資本の観念が固められる。「利子生み資本」は、「純粋に幻想的な観念」であり、ただ債券を、それにたいする自分の占有権を、売ることができるだけであり、この債務証券が売れないものになった瞬間からこの資本という外観はなくなる。これらの証券の請求権は、絶えず変動する架空な貨幣資本で表現される。

信用制度は結合資本を生みだす。株式は、この資本によって実現されるべき剰余価値にたいする按分比例的な所有権にほかならない。

このような所有権は、その価格が独特な運動をし独特な定まり方をする商品になる。その市場価格は、その権利名義によって取得される収益の高さと確実性につれて変動する。この証券の市場価値はある程度まで投機的である。というのは、この市場価格は、ただ現

実の収入によってだけでなく、予想され前もって計算された収入によって規定されているからである。……その価値は、つねに、ただ、収益が基本換算されたもの、すなわち、収益が幻想的な資本にたいしてそのときの利子率で計算されたものでしかない。

だから、貨幣市場の逼迫の時期にはこのような有価証券の価格は二重に下がる。しかし嵐が去ってしまえば、これらの証券は、失敗した企業や山師企業を代表するものでないかぎり、再びもとの高さに上がるのである。恐慌中に起きるこれらの証券の減価は、貨幣財産の集中のための強力な手段として作用する。だから、このようなもとの、信用破綻もまた、「幻想的である」。

利子生み資本や信用制度の発展につれて、同じ資本が、または同じ債券でしかないものさえが、いろいろな人手のなかでいろいろな形で現われるいろいろに違った仕方によって、すべての資本が二倍になるように見え、また場合によっては三倍にもなるように見える。その結果、「現金、すなわち金または銀行券」として持っている銀行の準備金は貨幣の逼迫の時期には対応できない。

すべての資本主義的生産の国には、このような形態で巨大な量のいわゆる利子生み資本または **moneyed capital** が存在している。そして、貨幣資本の蓄積というものの大きな部分は、生産にたいするこのような請求権の蓄積のほかには、すなわちこのような請求権の市場価格の蓄積、その幻想的な資本価値の蓄積のほかには、なにも意味しないのである。

そのうえに、この架空な銀行業者資本の大部分は、銀行業者の資本を表しているのではなく、利子がつくかどうかにかかわらずその銀行業者のもとに預金している公衆の資本を表しているということが加わる。

・「第二十九章 銀行資本の諸成分」の要約と現代の私たちが留意すべき点

「第二十九章 銀行資本の諸成分」の要約

「第二十九章 銀行資本の構成」は、①「現金、すなわち金または銀行券」と②「有価証券」とからなっており、その最大の部分は「有価証券」で、③「その割引が銀行業者の本来の業務とされる」「商業証券、手形」と④国債証券(過去の資本を表しているもの)等の「公的有価証券」や株式(将来の収益にたいする支払指図券)などの「利子付証券」の二つからなっていることを述べ、②を中心に論究している。

②の「利子生み資本」は、貨幣資本の蓄積の大きな部分を占め、資本主義的信用制度のもとで二倍にも三倍にもなった「幻想の産物＝支払がその子(利子)とみなされる資本」に転化し、その信用制度に決定的な影響をあたえる。

「利子生み資本」は、その価格が独特な運動をし独特な定まり方をする商品となる。その市場価格は、その権利名義によって取得される収益の高さと確実性につれて変動する。この商品の市場価格は、ただ現実の収入によってだけでなく、予想され前もって計算された収入によって規定されているから、ある程度まで投機的である。

また、資本主義的信用制度のもとで二倍にも三倍にもなった信用の結果、「現金、すなわち金または銀行券」として持っている銀行の準備金は貨幣の逼迫の時期には対応できない。だから、貨幣市場の逼迫の時期にはこのような有価証券の価格は二重に下がる。しかし嵐が去ってしまえば、これらの証券は、失敗した企業や山師企業を代表するものでないかぎり、再びもとの高さに上がるのである。恐慌中に起きるこれらの証券の減価は、貨幣財産の集中のための強力な手段として作用する。だから、このようなもとの、信用破綻

もまた、「幻想的である」。

すべての資本主義的生産の国には、このような形態で巨大な量のいわゆる利子生み資本または **moneyed capital** が存在している。そして、この架空な銀行業者資本の大部分は、銀行業者の資本を表しているのではなく、利子がつくかどうかにかかわらずその銀行業者のもとに預金している公衆の資本を表しているのである。

現代の私たちが留意すべき点

「利子生み資本」は、ただ現実の収入によってだけでなく、予想され前もって計算された収入によって規定された市場価格をもつ、その価格が独特な運動をし独特な定まり方をする商品となること。この商品の市場価格は、その権利名義によって取得される収益の高さと確実性につれて変動するから、ある程度まで投機的であること。

そして、今後の展開の中で分かることだが、貸付可能な貨幣資本の蓄積は、再生産過程の現実の拡大に伴って信用制度が拡張されるごとに、それにつれて増大せざるをえないので、資本主義的生産様式が延命されればされるほどその役割は大きくなり、「利子生み資本」の「架空性」は資本主義経済を翻弄することになります。

だから、資本主義的生産様式に必然の産業循環の真の姿を正しくつかむためにも「利子生み資本」の「架空性」を正しく認識しておく必要があります。

「第二十九章 銀行資本の諸成分」についての大谷氏の考え・意見

大谷氏は「第二十九章」について、「はじめに」で「第5篇第25章以降の他の部分に比べると、この部分でのエンゲルスの手入れは相対的にわずかである。」と述べ、次に、「『5) 信用。架空資本』という表題について」と題して、『資本論』の第25章の「信用。架空資本」という表題に関して、縷々述べたあと、結論として次のように述べます。

「だから、『5) 信用。架空資本』という表題は、その前半の『信用』という語で、序論的部分で信用制度について概説することを示唆し、その後半の『架空資本』という語で、本論で対象とする **moneyed capital** を示唆したのだと考えられる。そして、このように読むことによって、はじめて、表題にまず『信用』(=信用制度)を掲げながら、それでいてその直後に『信用制度の分析』は範囲外だと言われている理由が理解できるのである。

この「II）」(「第二十九章」のこと——青山)では、信用制度のもとでの **moneyed capital** のもろもろの形態とそれらの架空性が論じられている、ということができるので、『[**moneyed Capital** の諸形態とそれらの架空性]』という筆者のタイトルを挿入しておく。(第3巻P153-157)と。

「第二十九章 銀行資本の諸成分」について青山の考え・意見

マルクスとエンゲルスは、第二十七章の“むすび”の部分で『資本論』の編集について、「これまでわれわれは、信用制度の発展——そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な廃止——をおもに産業資本に関連させて考察してきた。以下の諸章では、信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する」と述べています。なお、「信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察」しているのは第二十九章「以下の諸章」で、第二十八章はその橋渡しの草稿です。

だから、大谷氏が「序論的部分」という『資本論』の「第二十五章 信用と架空資本」以

降「第二十七章」までは「信用制度の発展」を述べ、大谷氏が「本論」という「第二十九章」以降で「信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察」していることは、『資本論』でマルクスとエンゲルスが明確に述べていることで、大谷氏の「示唆」したという不明確な開設は不要なのです。

そして、大谷氏は、「Ⅱ）」に「moneyed Capital の諸形態とそれらの架空性」というタイトルを付けるといいます。が、「第二十九章」の内容を見ていただければ分かります。エンゲルスの付けたタイトル「銀行資本の諸成分」で何の問題もありません。

なお、大谷氏は、157 ページの注 1)として、三宅義夫氏が「第二十五章」のタイトルの意味を自己流に解釈しているということに関し、エンゲルスに責任の一端があるかのように書いていますが、エンゲルスには何の責任もありません。

第25章は、エンゲルスの補足によって「恐慌」にまで踏み込んでいますが、信用制度の確立の経過と資本主義的生産様式のもとでの「信用」の役割、そして第 29 章へ繋がるものとして、貨幣資本の「架空資本」としての特質を、マルクスの草稿の流れに沿って「現にあるものをできるだけ整理し」、「ただどうしても必要な補足だけを加えるということ」通じて編集したもので、マルクスの草稿の内容に反するところなどなく草稿の趣旨が十分に生かされており、エンゲルスの「信用と架空資本」についての認識に誤りはありません。だから、エンゲルスには何の責任もなく、濡れ衣を着せるようなものです。

おまけ

「第二十九章」もエンゲルスの編集によって、大変読みやすく理解しやすいものとなっているが、「労働能力」という言葉が「労働力」と編集されているが、日本語で受ける語感として日本語では「労働能力」という言葉に戻したほうが良いように思いました。